

53 14歳の男子。学校検尿で異常を指摘され来院した。昨年も同様の尿の異常を指摘され、他院で経過観察されていた。自覚症状はない。血圧126/74 mmHg。眼瞼に浮腫を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。尿所見：蛋白3+、沈渣に赤血球50~60/1視野。尿蛋白は安静臥位でも消失せず、この1年間ほぼ同じ所見である。血液所見と血液生化学所見とに異常を認めない。腎超音波検査所見も正常である。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 食塩摂取量の制限
- c 蛋白質摂取量の制限
- d 抗血小板薬の投与
- e 腎生検

54 60歳の男性。心房細動の電氣的除細動の目的で入院した。30歳から高血圧。除細動処置を実施した日の夜から強い腰痛が出現した。腰痛は消炎鎮痛薬によって徐々に軽快したが、血清クレアチニン値が処置前の1.5 mg/dlから処置後4日目には3.6 mg/dlまで上昇した。処置翌日の腹部単純CT(別冊No. 22A)と1か月後の腹部単純CT(別冊No. 22B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 水腎症
- b 海綿腎
- c 腎結核
- d 腎梗塞
- e 多発性嚢胞腎

別冊

No. 22 写真A、B

55 43歳の男性。右の側腹部痛を主訴に来院した。今朝、明け方に急に右の側腹部から鼠径部へかけて強い痛みが間欠的に起こり、救急外来を受診した。肉眼的に血尿を認め、嘔吐を1回した。尿所見：蛋白1+、糖(-)、潜血3+、沈渣に赤血球多数/1視野、白血球10~20/1視野。血液所見：赤血球525万、Hb 14.6 g/dl、Ht 43%、白血球9,100、血小板34万。血液生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、アルブミン4.5 g/dl、尿素窒素29.0 mg/dl、クレアチニン1.3 mg/dl、尿酸7.3 mg/dl、総コレステロール244 mg/dl、トリグリセライド154 mg/dl、総ビリルビン0.3 mg/dl、AST 24 IU/l、ALT 17 IU/l、LDH 264 IU/l (基準176~353)、ALP 201 IU/l (基準260以下)、Na 142 mEq/l、K 4.5 mEq/l、Cl 106 mEq/l。

対応として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 輸液
- b 膀胱鏡
- c 緊急手術
- d 硬膜外麻酔
- e 腹部単純CT

56 58歳の女性。排尿時痛を主訴に来院した。2日前から頻尿、残尿感および排尿時痛を認めた。発熱はなかった。普段は腹圧を用いて排尿をしていたが、明らかな残尿感は自覚していなかった。10年前から糖尿病を指摘されていたが未治療であった。体温36.5℃。腹部は平坦、軟で、下腹部の圧痛はない。尿所見：蛋白1+、糖2+、沈渣に赤血球5~10/1視野、白血球5~10/1視野。血液所見：空腹時血糖186 mg/dl、HbA_{1c} 9.0% (基準4.3~5.8)。

次に行う検査はどれか。

- a 膀胱鏡
- b 残尿測定
- c 骨盤部造影CT
- d 静脈性尿路造影
- e 排尿時膀胱造影

57 65歳の男性。排尿困難と夜間頻尿とを主訴に来院した。直腸診で鶏卵大の前立腺を触知するが、硬結は認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、沈渣に赤血球 0～2/1視野、白血球 1～3/1視野。PSA 1.2 ng/ml (基準 4.0 以下)。1回排尿量 200～250 ml。国際前立腺症状スコア(軽症 0～7、中等症 8～19、重症 20～35)と QOL スコア(別冊No. 23)とを別に示す。

対応として適切なのはどれか。

- a 抗菌薬投与
- b 睡眠薬投与
- c α_1 遮断薬投与
- d 抗男性ホルモン薬投与
- e 経尿道的前立腺切除術

| |
|--------------------------------------------|
| 別 冊 |
| No. 23 <input checked="" type="checkbox"/> |

58 64歳の男性。人間ドックでPSA値の異常を指摘され来院した。既往歴と家族歴とに特記すべきことはない。身長164 cm、体重63 kg。体温36.3℃。脈拍72/分、整。血圧138/78 mmHg。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知せず、圧痛や抵抗を認めない。下肢に浮腫を認めない。直腸診でクルミ大の前立腺を触知するが、硬結は認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、沈渣に赤血球と白血球とを認めない。血液所見：赤血球460万、Hb 15.1 g/dl、Ht 45%、白血球6,300、血小板26万。PSA 7.3 ng/ml (基準4.0以下)。前立腺生検で中分化型の前立腺癌を認める。腹部造影CTでリンパ節腫大を認めない。骨シンチグラフィで異常集積を認めない。患者は治療を希望している。

治療法として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 温熱療法
- b 放射線治療
- c 抗癌化学療法
- d 前立腺全摘除術
- e 経尿道的前立腺切除術

59 21歳の女性。突然の左下腹部の激痛を主訴に来院した。子宮は後傾後屈正常大で可動性は良好、左卵巣に超鷲卵大の腫瘤を触知し、強い圧痛を認める。腹部エックス線単純写真で左側小骨盤腔に歯状の石灰化を認める。直ちに腹腔鏡下手術を行った。摘出腫瘤の H-E 染色標本(別冊No. 24)を別に示す。

正しいのはどれか。

- a 胚細胞由来である。
- b 境界悪性腫瘍である。
- c アンドロゲンを産生する。
- d 両側付属器摘出術が適応である。
- e α -フェトプロテイン(AFP)が上昇する。

| |
|-------------------|
| 別 冊 No. 24 写 真 |
|-------------------|

60 40歳の女性。以前から過多月経があり、人間ドックで小球性低色素性貧血を指摘され来院した。便潜血反応陰性。子宮頸部細胞診クラスⅡ。骨盤部単純 MRI の T2 強調矢状断像(別冊No. 25)を別に示す。

薬物療法として適切なのはどれか。

- a エストロゲン
- b GnRH アゴニスト
- c メトトレキサート
- d プロモクリプチン
- e プロスタグランジン

| |
|-------------------|
| 別 冊 No. 25 写 真 |
|-------------------|